



当診療所は、一九五五年に旧葛生町が開設した無床診療所です。職員は医師一人、看護師二人、非常勤を含む事務職二人の計五人。周辺地域の高齢化が進み、患者さんの多くは高齢者の方々です。

スタッフの支え

氷室診療所に二〇〇六年四月に赴任しました。こちらに来てから早くも一年がたちます。

全国各地で活躍する自治医科大学卒業の医師たちがリレー形式でエッセーを届ける「Dr. ジチ」。全国一巡目では、それぞれが「地域医療」の最前線でのとまどいや喜びなどを語ってくれた。きょうから再び、「地域医療」をキーワードに「日本一周」の旅が始まる。

いのうえ **井上**

やすひろ **康浩**

25期生、2002年卒



診療所の全景。左に見えるのは医師住宅。通勤時間わずか10秒

佐野市国保氷室診療所

【私の勤務地】旧葛生町(現在は合併し佐野市)の中心部から12キロほど北西に進んだ秋山川沿いにある無床診療所。周囲は山に囲まれている。周辺には採石場が多く、細い道でもトラックの往来が激しい。

ゆったりした時の流れの中

しかし、高齢者といつても元気がな方がほとんど。中には遠い距離を自転車で診療所まで来る患者さんもいます。主に内科診療を行っていますが、必要に応じて外科、整形外科、小児科診療も行っています。レントゲン装置、超音波装置、上部消化管内視鏡装置があり、簡単な検査であれば診療所で行っています。

私は自治医科大学を二〇〇二年卒業後、初期臨床研修を同大病院に二年間勤務させていただきました。

芳賀赤十字病院では外科として勤務していました。そのため内科診療の経験は乏しく、赴任当初は大きな不安がありました。しかし、今までの経験や知識を生かし、また、診療所のスタッフの方々に支えられながら診療を行ううちに、不安は解消していききました。

もちろん、外科の知識も診療には非常に役立っています。やはりへき地診療所の医師には、総合医としての能力が必要だと実感させられました。

診療所での生活で、今までの病院と大きく違うのは、やはり時間の流れだと思えます。病院勤務では仕事に追われる生活をしていたような気がします。

しかし今は、時に忙しいこともありますが、時間に追われるほどのことはなく、患者さん一人一人にゆっくりと十分な時間を使つての診察ができます。また、仕事以外でも、家族と一緒に過ごす時間が増え、もうす

ぐ二歳の息子も、よくなつてくうになつてくれました。

いいことばかりの診療所生活に見えますが、時に不安もありです。将来的に外科医を目指している私は、しばらく手術の現場を離れていることが不安になることがあります。

悩みは支援病院

それでも、「今の経験は必ずどこかで生かせることがある」と思い、今しか経験できない毎日を過ごしています。

最近の診療所の悩みの種は「後方支援病院」のことです。当診療所で入院が必要になった患者さんが出た場合は、今までは佐野市民病院に依頼することがほとんどでした。しかし、佐野市民病院の医師減少に伴いそれが難しい状況になってい

ます。そのことは、診療所に来る患者さんにも大きな不安になっていることを感じ取ることができ

ます。このエッセーが掲載されるころには、何とか状況が改善されていることを願つばかりです。

(次回予定は山口県)